

# 樹下孔雀蒔絵螺鈿箆笥の修復

The Restoration Study on Cabinet with Peacock and  
Trees Design by *Makie* and *Shell Inlay* Techniques

加藤 寛・小菅 太一・室瀬 祐  
館 敬子・新井菜穂子・大多和弥生

Hiroshi KATO, Taichi KOSUGE, Tasuku MUROSE,  
Keiko TACHI, Nahoko ARAI and Yayoi OTAWA

「鶴見大学紀要」第49号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成24年3月）別刷

## 樹下孔雀蒔絵螺鈿筆筒の修復

The Restoration Study on Cabinet with Peacock and Trees

Design by *Makie and Shell Inlay Techniques*

加藤 寛・小菅 太一・室瀬 祐  
館 敬子・新井菜穂子・大多和弥生

Hiroshi KATO, Taichi KOSUGE, Tasuku MUROSE,  
Keiko TACHI, Nahoko ARAI and Yayoi OTAWA

### 1. はじめに

「樹下孔雀蒔絵螺鈿筆筒」(個人蔵)は、17世紀初頭に製作され、ヨーロッパに輸出した南蛮漆器のひとつである。筆筒の四周に框組をし、内側から鏡板を当てて筆筒としている。正面には慳貪式の前扉1枚を取り付け、内部に大小の抽斗を納めている。框組の洋筆筒はサントリー美術館や東京藝術大学大学美術館、海外ではドイツ・ゴータにあるフリーデンシュタイン城にも保管され、比較的早期にヨーロッパに輸出された家具。筆筒の外表面と抽斗正面には萩・桔梗や紅葉などの秋の草木と孔雀などエキゾチックな画題を取り合わせた意匠を蒔絵と螺鈿で表している。蒔絵は平蒔絵と梨地のシンプルな組み合わせで桃山時代に流行した高台寺蒔絵と類似する技法である。螺鈿は中厚の鮑貝を用いて樹木の葉や蒔絵を取り囲む石畳文などの幾何学文様を表している。この筆筒は永くヨーロッパで保管され、表面の艶がなくなるたびにシェラックを塗布して保存されたために、現在は、塗料の劣化に伴い表面が褐色に変色している。今回の修復ではこれらヨーロッパで塗った塗料を除去し、脆弱になった螺鈿を貼り戻し、表面に摺漆を行うことで塗膜の強化を行う。

漆芸文化財の修復にとって必要なことは、使用する修復材料の分子量の調整と適切な変性を行うことにある。たとえば螺鈿を貼り戻す膠の場合、湯煎した膠水を超音波発生装置にかけて分子量を低下させる。また、背面にある木地からの亀裂を補修するための刻苧に使用する麦漆などの変性を的確に行うことが要求される。今回の修復は、鶴見大学大学院文化財学の院生6人により行うために、基本的な修復材料の作り方や修復技法などについて授業を通して指導し、実践的な修復経験

を通して、より深く文化財の在り方を理解する好機であると考えている。以下に修復の課程及び成果をまとめたのでここに報告する。

### 2. 概要

資料名：「樹下孔雀蒔絵螺鈿筆筒」(個人蔵)  
時代：17世紀 江戸時代  
法量：幅53.5cm×奥行き35.0 cm×高さ37.3 cm  
修復者：小菅太一 室瀬祐 館敬子 小黒恵治  
新井菜穂子 大多和弥生  
修復場所 鶴見大学 6号館 保存処理室  
修復期間 平成22年4月20日～平成23年8月31日

#### <品質形状>

木製黒漆塗り、正面に前開きの扉が1枚付いた直方体の洋筆筒で、内部に8つの抽斗を納める。扉表中央に金銅製八双錠、扉裏には受金具及び鉸4本、両側面に金銅製提環及び菊座一対、各角には金銅製角金具、内部抽斗正面には金銅製錠・鉸6本、各抽斗に金銅製環台・錠を付ける。正面には中央に孔雀、紅葉、桔梗、萩を蒔絵螺鈿花形枠の中に描く。花形枠の周囲に七宝繫文を廻らす。扉裏と背面に朝顔唐草、左側面に桜、橘、萩、右側面には紅葉、橘、桔梗、笹を描く。天板には蒔絵螺鈿花形枠の中に孔雀2羽、柳、桔梗、椿を描く。内部の上段と左側抽斗2段に朝顔唐草、右側2段に葛唐草、下段左に桐の枝、下段右に橘を描く。中央鍵付き抽斗に柱とアーチに鋸歯型文様唐草、柱の間に紅葉を描く。下段に花輪違文、周囲に幾何学文を施す。

全ての面の窓枠の仕切りには二重螺鈿界線と石畳螺鈿枠が設けられる。各面・各抽斗の框に南蛮唐草を描く。

## 樹下孔雀蒔絵螺鈿筆筒の修復

蒔絵は平蒔絵で葉・枝・花の細部に付描と描割を用いている。また孔雀の一部と葉脈、花脈に針描を施す。天板と扉の一部には後世に描かれたジャパニング<sup>(注)</sup>が見られた。とくに天板の孔雀の頭部には赤い塗料で彩色が施されていた。各面の花、七宝繫文、二重螺鈿界線、さらに天板の孔雀の羽に鮑貝の薄貝を用いている。薄貝は厚さ約0.2mmであった。

(注) ジャパニング 西洋における日本漆器の模倣技法のこと。

### <損傷状況>

#### 全体 (図1)

樹下孔雀蒔絵螺鈿洋筆筒の全体を被ったシェラックが劣化し黄変していた。塗膜と螺鈿の剥離剥落箇所が多数見られ、蒔絵の損傷部分に西洋の塗料による補修が見られた。螺鈿の欠失箇所にも貝による補填が認められた。

#### 正面 (図3)

界線や七宝繫ぎに使用された螺鈿の剥落が多く、一部補填されていた (図5)。扉表中央の錠は付け替えられており、金銅製錠が1本紛失していた (図7)。

#### 右側面 (図8)

表面はシェラックで被われ、塗膜が劣化し黄変していた。特に提金具周囲の塗膜は厚く暗褐色を呈し、枠及び界線部分に螺鈿の剥離が認められた (図10,12)。

#### 左側面 (図14)

全体に螺鈿と塗膜の剥離が見られた。とくに下部石畳文様の螺鈿の剥離や欠失が多く、二重界線付近に相当な螺鈿の欠失が認められた (図16)。

#### 背面 (図18)

全体に付着したシェラックの劣化及び塗膜と螺鈿の剥離が見られた。上部界線の右側3箇所に螺鈿が補填されていた (図20)。背面やや上部に左右を貫く木地の亀裂が生じていた。

#### 天板 (図22)

全体を被うシェラックの劣化による黄変、及び框の内側の塗膜が厚く褐色に変色していた。天板全体の螺鈿の剥離剥落が多く認められた (図24)。

### 3. 修復仕様

今回の修復は鶴見大学受託研究として行われた。今回の仕様として、内部及び框以外を対象とし、雁皮紙の養生による螺鈿や塗膜の剥落防止、クリーニング、螺鈿の再接着、際錆を施した後に漆固めを行う。修復

には茨城県奥久慈産の生正味漆を使用する。

### <修復作業工程>

#### ①調査及び作業工程の確認

品質、形状、加飾技法と現状の損傷状況を調査記録し、修復の記録のために写真撮影を行った。

#### ②塗膜と螺鈿の養生

養生は螺鈿や塗膜の剥離などの貼り戻し作業をするまでの応急処置である。払い毛棒を使用し、天板の埃を除去した後、雁皮紙 (約2mm×5mm) を水で希釈した生麩糊で張り、塗膜や螺鈿の剥落防止を行った (図26,27,28,29)。

#### ③クリーニング

表面の汚れと後補塗料の除去を目的としてクリーニングを行った。事前に水、エタノール、無水エタノールで溶剤テストを行い、無水エタノールが最も適していると判断した。クリーニングには綿棒と木綿布を用いて表面の汚れと劣化した塗料の除去を行った (図30,31)。ジャパニング及び洋塗料での修復箇所があり、これらの部分を避けクリーニングを行った。

#### ④螺鈿と塗膜の再接着

クリーニング後、螺鈿と塗膜の再接着を行った。圧着用の木枠を作成し、芯張りによる再接着を行った (図32,33)。芯張りには、塩化ビニールシート・膠水・竹ひご・面相筆・蒔絵筆を用いた。仮止めの養生は水を含んだ面相筆で除去し、蒔絵筆で接着部分に膠水を注入した (図34,35)。膠水は三千本膠を一晩膨潤させ、麻布で濾した後に湯煎し、必要に応じて濃度を水で調整し使用した。塗膜が脆弱な部分は、無水エタノールで塗膜を軟化させてから膠水を注して再接着し、元の場所に収まらない螺鈿は布目罫と耐水ペーパーを用いて大きさを調整してから圧着した。後補の螺鈿を除去し、以前の状態に復した (図20,21)。

#### ⑤正面上框の修理

正面上框の下に留められていた後補材が浮き、扉の開閉に支障があるため、麦漆による再接着を行った (図36,37)。

#### ⑥際錆

塗膜や螺鈿の再接着後、剥落防止に周囲の段差に際錆を付けた (図38)。際錆には水練りした砥粉と生漆を合わせた下地を使用した。

#### ⑦亀裂部分の充填

背面には大きな亀裂があり、放置すると螺鈿や塗膜の新たな損傷を招く恐れがあるため刻苧を充填し、錆を付けた(図41)。刻苧は3度に分けて行い、#24、#50、#70のふり分けた檜の木粉にそれぞれ麦漆を混ぜた(図39,40)。次に、地粉、砥粉、水、生漆を混ぜた切粉を付け、砥粉、水、生漆を混ぜた錆を施した(図42)。木砥及び名倉砥石で表面を研ぎ平滑にし、最後に松煙を混ぜた生漆で摺漆した(図43,44)。

#### ⑧ 銚穴の充填

扉表中央の銚金具は付け替えられており、元の銚金具の銚の穴が残されていたため穴埋めを行った。銚穴に刻苧を詰め直径に合わせた竹ヒゴを埋めた後、錆付を行った(図45,46)。

#### ⑨ 漆固め

経年劣化による漆塗膜表面のマイクロクラックに漆固めを行い、塗膜の強化を図った。生漆を同量のリグロインで希釈し、溜刷毛及び蒔絵筆で塗布した後に木綿布で拭いた。表面に漆を残さないためにアルコールで完全に拭ききった(図47,48,49)。背面及び両側面はこの作業を2回繰り返した。天板及び扉にはジャパニングと黒い充填剤があり、リグロインによって溶解を招く恐れがあるため、それらの部分を避けて漆固めを1回行った(図50)。

#### ⑩ 後補塗膜の強化

漆固めを行わなかった部分は塗膜保護のためにシェラックを塗布した。シェラックはフレーク状のシェラックレモン12gと無水エタノール100mlを混ぜ合わせて精製したものを原液とし、原液のままでは艶が発生するため更に無水エタノールで濃度70%に希釈して使用した。更に劣化の顕著な部分には濃度80%のシェラックを塗布した(図51)。

#### ⑪ 写真撮影及び修復報告書の作成

修復作業終了後、写真撮影及び修復記録をまとめ、修復報告書を作成した。

樹下孔雀蒔絵螺鈿箆筒の修復

【図版】



図1 修復前 全景



図2 修復後 全景



図3 修復前 正面



図4 修復後 正面



図5 修復前 正面 螺鈿剝離剥落部分



図6 修復後 正面 螺鈿剝離剥落部分



図7 正面 鍍金具 鍍金の紛失部分



図8 修復前 右側面



図9 修復後 右側面



図10 修復前 右側面 右隅部分



図11 修復後 右側面 右隅部分



図12 修復前 右側面 提鑲部分



図13 修復後 右側面 提鑲部分



図14 修復前 左側面



図15 修復後 左側面

樹下孔雀蒔絵螺鈿筆筒の修復



図16 修復前 左側面下部  
石畳文様と二重界線



図17 修復後 左側面下部  
石畳文様と二重界線



図18 修復前 背面



図19 修復後 背面



図20 修復前 背面 螺鈿補填部分



図21 修復後 背面 螺鈿補填部分



図22 修復前 天板



図23 修復後 天板



図24 修復前 天板

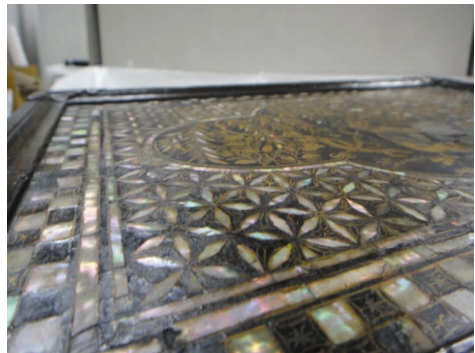


図25 修復後 天板



図26 右側面 養生作業



図27 使用した蒔絵筆



図28 養生紙作成



図29 養生に使用した生麩糊

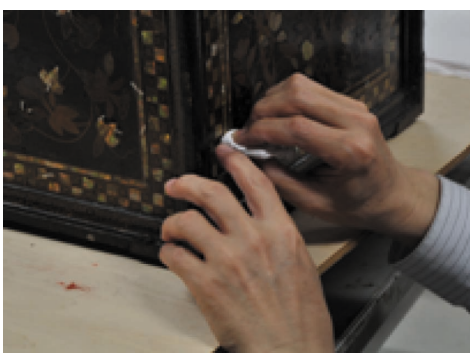


図30 右側面 クリーニング (木綿布)



図31 右側面 クリーニング (綿棒)



樹下孔雀蒔絵螺鈿簞笥の修復



図32 圧着作業に用いた木枠



図33 天板 圧着の様子



図34 天板 面相筆による養生の除去

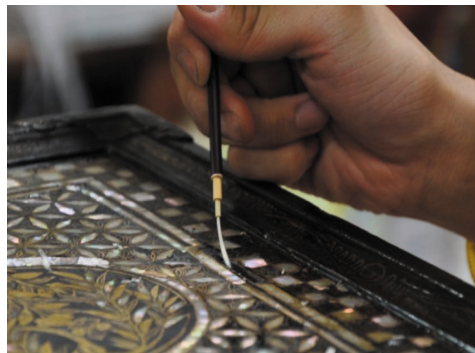


図35 天板 蒔絵筆による膠水の注入



図36 上框下の損傷箇所



図37 上框下の再接着の様子



図38 正面 際錆



図39 刻芋作成



図40 背面 刻芋付



図41 背面 亀裂充填前



図42 背面 亀裂充填後



図43 背面 摺漆 (松煙入)



図44 背面 摺漆後



図45 正面 鋏穴の充填前



図46 正面 鋏穴の充填後

樹下孔雀蒔絵螺鈿簞笥の修復



図47 漆固め 生漆をリグロインで希釈



図48 背面 漆固め



図49 漆の拭き取り様子



図50 天板 漆固め天板

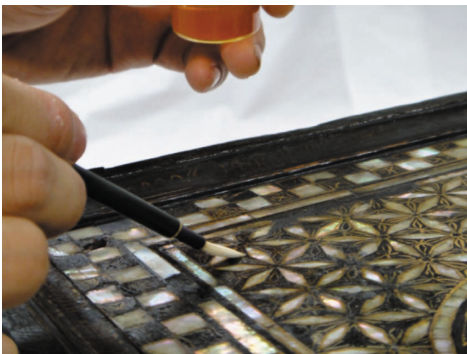


図51 天板 シェラックの塗布